主に日本語を専攻され、

時に東京のICUに

などを勤

結婚され

24歳で再来日

A L T

を買うか」

な S

持続可:

シャ

戦争、気候変動、高齢化 不安ばかりの昨今に必要なのは 「希望」です。 「何を買い、誰を支え るのか」、消費は「愛」でもあります。 この愛が地域や未来に希望を呼ぶ のです。 『おむすび』

巻110号になる。

び』を恵子さんが発行

### 生産者と消費者双方の 作農業に取り組んでいる。 海道に移住を決意 一教師をされていた方だが、 樽市花園でCSAショップを営むミリケン夫妻(左写真、 、オルニア州サンノゼ出身。 域のものを買い支えるショップ 持続可能な社会を目指すCSAショップの運営に携わる。 恵子さん)。キ―スさんは今春まで19年間、本校で英 は米国 「顔の見える関係」づくりについて伺った。 また、 $\mathcal{O}$ 退職されて、 9 恵子さんと共に地域のものを買 コミュ 赤井川村で本格的に畑 ニティ

横浜で暮らしていたが、 広い土地を求めて赤井川 を育てる環境を考えて、 16年になる。

恵子さんは東京出身だが 本に支社のある会社に勤め、 初めは余市に住んだが、 北海道 に移り 子ども 親

生徒会通信 2023年12月1日 第48号 道に移住して21年になるが、こ 「人間らしく生きられる所」 勤で各地で暮らした。

北海

を選択

える。

CSA (Community Supp

発行 小樽双葉高校

たり、 朝 3 ねぎ、 うハードスケジュー 野菜を届け、 麦などを栽培し、 はかぼちゃ、 夏、 7井川 時起き。 ハウスではトマト、 じやがいも、 ブロッコリー ショップで販 万では3 JAとショップに 赤井川に戻 ブロッ 町 J 歩 流して ル にんにく、 コリー 0 Aに出荷し をこなす。 収 畑 次るとい は穫期は き を いる。 地で ゆう 所 玉 有

# みみずく舎 地に足をつけて」

き方を求め、 くれた方の「地に足をつけるよ たところ、 うに」という言葉が響いたから みみずく舎」 SAショップがある。 ミリケン夫妻の活動 みみずく舎の販売活動として いう。 みみずくの まさにそのような生 ミニコミ紙 実践してきた。 由 彫り物 田来を聞 0 また、 『 お む 総 称 を

## 持続可能な社会をい物の力」で Aショップはただのお店 「誰を支えるのか 能な社会を目 ルビジネ 誰 通

CSAショップ、花園、市役所通りにある。

る。 果たして地域のためになるの で誰でも買えるようにしている。 農産物を届けるのではなく、 が見える」信頼関係を築いて ŧ な から商店がなくなれば、 一つに 要素である。 後志にある小規模な流通品を集 肉、小樽のパン、 (ミニコミ紙 顔 を維持していく上で大切な が見えることは、 生 を中心に、 雇用の問題がある。 住民だ。 産者が消費者と契約して 産者と消費者双方の 地域は益々衰退する。 『おむすび』 他に余市の豆 店も求人もなく かまぼこなど の買い物 」より) 「地域社 困る 地 「顔 か。 店 は  $\mathcal{O}$ 域 11

のたくさんの人の思いが伝わっ

orted Agriculture)は「地域

ものを買い支える」目的を持

ら仕事を をすごく尊 仕事をし るのが憂鬱に 入ると肌 そんな中、 敬 て いる農 いした記 毎日 た農業体 家 に日陰に ま 憶 なるよう 外に出 ず。 がの 朝か 方 日 ŋ Þ

もの」だ。

農産品は

赤井川 顔の見える

地域のもの」

います。 ても低い ます。 ŧ 働と相まって 0 万円とサラリー よります そんな農家 ・です。 が 後継者も 0 1 年 5 収 ンと比べ い肉体労 O は は規模に 5 3 0

いていました。っにCSAショップ した。 えずに買い物をするのではないていました。それは何も考 域貢献をするといっ 者 さんはミニコミ誌 今回取: を助ける、 地産地 材し 消を意識し 買い物による地 たミリケン恵子 プの意義を書 『おむすび』 たことで て生産

よくありません。その 懸念されている昨今、 買い物を意識しみなさんも、 とても重要だと思いました。 しょうか。 っていくというこの考え方 業後継者不足です。 料自給率は38%と、 の中だからこそ地 などで食料 そこに至るまで してみてはどう 日々の食事や 域 の 中 で の あ ま り で助け 危 目 本の 機が CSAショップの店頭

で

ジ、

足もみ、

など東洋医学を中

学びやマーケットも提供

2階では温熱療法、

マッサ

製品も販売している。

スリッパなどの手芸品、

ガラス

に絵はがき、

かごバックや手袋

用品など)の譲渡や販売、さら

心にしたセラピー

を受ける場を

設けている。

# SDG sも実践 (がつながり支え合う場

をする人がいた。 る人、2階では温熱療法の施 していた。 取材の間も、 お店に買い物に来 頻繁に人が出 入

ミを増やすことにも気をつけて 囲気だ。 を焼いて提供している。 で採れた野菜で数種類の も食材を作った人が誰なのかが フとして腕を振るう。 茶スペースで、キースさんがシェ かる仕組みになっている。 店頭には各種野菜、パン、 は下写真)恵子さんは赤井 舗の右側はレストラン・ 買い物の過剰包装がゴ はがきなどが所狭しと 豆腐、 家庭的で温かな雰 農産加工品、 (メニュ いずれ ケ 丰 器 でなく、地域の小規模生産者と 販

CSAショップは農産物だけ

売もしている。

 $\mathcal{O}$ 

持ち込みや貸し

出



小規模な流通になる。

そうする

食品の輸送にかかる距離

これらの品々は後志の

中での

るので、

C O 2 の

排出を抑える

-フ |

-ドマイレ―ジ」を短くす

ことができる。

また、物を大切に使うことを

古道具(家具やスキー

乳などである。 食品では、豆腐、 もつながっている。

魚、

蜂蜜、

かまぼこ、

牛 自

パン、

たとえば、

てする。

ンカレー 850円 850円) プロ えんど ロトネI 茶が フきますめ レストランのランチメニュ-

## 容器 けて、

### ない」と感じ、 具体的にはTPP, とにしたのだという。 エネルギ―などだ。 えの種子の問題、

頭

<u>ا</u> アトレード クショップ、 0 ネ屋さんの出張、 定されている。 ビック」のほかに、 ピーをはじめとする「からだシ 魅力あふれるイベント リメイク会、 りの市場「シビックマー ミニコミ紙『おむすび』 の見える繋がりを生み出す手 の案内もある。 -商品の販売などが予 雑貨屋の出店、 しめ縄作りワ アクセサリー 先述の 今月はメガ には フェ セラ ケッ

# 絵本文庫も開設

読み聞 さん。4人のお子さんに絵本を 習会や講座などを通 本の貸し出し、 ティアをしている。 小学校でも読み聞かせのボラン 「絵本文庫」を開設された。 大いに助けられたという恵子 にCSAショップの2階でも アメリカでの子育てでは絵 かせして育て、 読み聞かせ、 そして、 į 赤井川 絵 講 0

食糧危機を危惧

歴史講座も開催している。 関わるテーマで映画の上映や講 東アジアの近代史を学んでいる。 「東日本大震災と原発事故を受 元小学校教諭平山先生の 話し合いの場を設けてきた。 今の生活が当たり前では 学びの場としては、 行動をおこすこ 消費者活動に 恵子さんは 原発・自然 遺伝子組み 今は 連続 なかった。本来の目的に立ち返 ためで「勤め」にきたわけでは お百姓と猟師 大切に育てたいと考えている。 と関わる 本物の持続可能な生き方 北海道に来たのは「暮らす」

り、ミリケン夫妻さんは 駆除、肉・ 接に向けて格闘した結果だ。 ながら日本語での筆記試験や 鹿を獲ったという。 資格を取った。 になった。 資格取得後、 夏にキースさんは 体の処理まですべ 9月から7 英語を母語とし 罠をしかけ、 「狩猟」

面

る。 るようにしたい」と語る。 両立が大変だった。 キースさんは と目の回るような忙しさである。 た作物は加工して貯蔵もして 手作りの家に暮らす。 かない。お店にもっと人が来 朝から晩まで畑から家、 赤井川では冬用の薪を作り、 卵と肉は自前で手に入れる。 「今年は畑と店 でも頑張る 畑で採 お店 0

と通信に記している。 り着いたと自信を持って言える」 いに持続可能な生き方にたど 一方、恵子さんは「私たちは

小樽市花園2丁目 6-16 080-6085-9063 電話

営業時間 10:30~5:15(祝日・土 曜日は5時まで)

CSAショップ

定休日:水・日

# 食べ物を作り共に支え合う お二人はその生き方を その手を外に差 食糧危

ご家族で完結させない。

を見据え、

伸

コミ

ユ

ニティを築

離農など、 資材の高騰、 外国での 農業者の高齢 気候変 化

「アナログな世界」

を

率は上がる。この仕組みを各 さえできていれば、 で広げていく意向だ。 模農家をつなげれば、 SAショップが核になり、 しては解決できると考える。 食糧不足の心配は「地域」 んとつながり、 ん。後志のいろいろな生産者さ 避けられるはずです」と恵子さ 「みんなで支え合うこと」これ 食べ物を作り続けること」 起こるとも言われていますが、 支え合うことで、 食糧危機 食料自然 に関 規 C

0)

「百姓」

# 移動販売で女性の自立

といい」という。 どもを連れて移動販売ができる や仁木の農業を守りたい」と語 とにもなる。 主となり、自立する場を作るこ る恵子さん。 「地元の赤井川、 「いろいろな所で女性が子 今後の活動として 女性が個人事業 生産者を守る さらに余市

なぎ、愛と希望を届けるミリケ 夫妻の姿に心を動かされた。 地域の将来を見据え、